演題7．口腔底に発生した lymphoepithelial cyst の一症例

○斎藤　善広，大屋　高徳，藤岡　幸雄，
武田　泰典*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

Lymphoepithelial cyst は，1mm〜10mm程度の膨隆として口腔内に無症候性に発症し黄白色ないしクリーム状の内容液を含む嚢胞とされており，その報告数は内外で136例と少数である。今回我々は，舌下面に生じた本嚢胞の1例を経験したので報告した。

症例：患者は62歳，男性で，既往歴，家族歴に特別なことは無い。当科臨床診断下顎歯肉癌にて手術を行った際，病理組織的検索により本嚢胞の併発を認めた。その組織像は，口腔粘膜上皮下にあり錯角化を伴った重層扁平上皮を嚢胞壁として，その周囲に，リンパ浸潤ないし胚中心をもったリンパ組織を有し，その内腔には剥離上皮の存在を認め，lymphoepithelial cyst の典型像を示した。さらに一部嚢胞壁には，多列線毛上皮やオンコサイトの存在も確認された。嚢胞上皮の基底層は比較的平坦であり，上皮脚の形成はみられず，リンパ組織を構成する細胞は，おおむね小型のリンパ球であり，上皮直下に形質細胞が比較的多く認められた。

その発生については2つの説がある。ひとつは，Knapp が示した口腔扁桃（oral tonsil）の腺窩（crypt）の閉鎖により発生する偽嚢胞という考え方で，Guinta とCataldo，さらに Toto らは口腔との連続性を示すことによりその考え方を支持した。もうひとつは，Bhasker らによって示された，胎生期口腔粘膜に存在するリンパ組織へ腺上皮が迷入することによって発生するという考え方で，Vickers はハムスターの顎下リンパ節へ頬粘膜を移植し，嚢胞を発生させることによりこれを指示した。

本例における，発生機序を明らかにすることはできなかった。

今回，この概要について多少の文献的考察を加え報告するとともに，先人の症例に加えた。

演題8．下顎骨に発生した massive osteolysis の1症例

○柴田　貞彦，大屋　高徳，藤岡　幸雄，
武田　泰典*，鈴木　鍾美*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

Massive osteolysis は特発的に無症状のうちに骨の融解が進む原因不明の稀れな疾患であり，全身のあらゆる骨に単発性あるいは多発性に発現するとされている。一方，下顎骨においても1933年に Thoma が初めて報告して以来，13例の報告をみるにすぎない。今回，私共は下顎骨に発生した massive osteolysis の一例を経験したのでその概要について報告した。

症例は，左側上行枝部の陥凹を主訴に来院した46歳の女性で，特に自覚症状は認められなかった。X線上では，下顎臼歯骨体部，顎角部，さらには上行枝部，関節突起部，筋突起部にかけての広範囲に骨の吸収を認めた。組織学的には，患部顎骨は不規則な配列を呈する膠原線維を主体とした線維性結合組織にほぼ置換されており，一部には血管成分の目立つ部分も存在した。また，破骨細胞は目立なかった。本例に対し，私共は顎切除後，自家腸骨移植，並びに A-O Reconstruction plate による再建を行った。現在のところ経過良好であり，引きつづき経過観察したい。

演題9．コンポジットレジンの隣接面研磨に関する基礎的研究

○中嶋　和郎，小原　雅彦，久保田　稔

岩手医科大学歯学部保存学第一講座

コンポジットレジンのストリップスによる隣接面研磨に関する基礎的実験を行った。

まず，GC，3M，井上製ストリップス3社11種の表面粗さを測定した後，3M製のストリップスにより研削回数および研削荷重を変化させた際の研削効率を，研削が困難な従来型コンポジットレジンのクリアフィルFIIを用いて測定した。次に400g研削荷重を臨床条件とし，この荷重下における表面粗さを